



令和元年度 さいたま市立土呂中学校 学校だより

見沼のほとり

第 3 号

令和元年6月1日

学校教育目標

主体的に生きる人間の育成 <意欲・健康・豊かな心>

感謝の気持ちをもって戦う

校長 冨田 敦

「対戦相手は戦ったことがないチームですが、3年間練習してきた成果を十分発揮し、勝ちたいです。今まで支え、指導してくださった先生や保護者の方々に感謝し、一戦一戦大切にしていきます。」(男子バスケットボール部 岡田 和 部長)

「1回戦で当たるチームは初めて戦う相手ではありますが、私たちが得意とするオフェンスでのパスランでチームをいい流れにしたいです。また、今まで支えてくださった先生、友だち、メンバー、そして保護者の皆さんに感謝の気持ちを忘れず、全力でプレーします。」(女子バスケットボール部 小林 愛 部長)

市学校総合体育大会に向けての壮行会で部長が決意を述べました。部長の多くが、「感謝の気持ちをもって」試合に臨むと語りました。壮行会のハイライトは代表2名による選手宣誓でした。

「もともと地上には道がない。歩く人が多くなれば、それが道になるのだ。決して平坦ではなかった道なき道を歩み続けた私たちに夢と感動を与えてくれた先輩たち、その多くが活躍した舞台である学校総合体育大会。私たちはまたその憧れの舞台を目指し、険しい道のりを歩んできました。息が切れるほどの上り坂、足がすくむような下り坂、先が見えないくらい曲がりくねった道、そんないくつもの困難を励ましあい、ぶつかりあい、そして信じあい、仲間とともに乗り越えてきました。私たちは、時には前に立って風よけとなり、また時には後ろに回って背中を押し続けてくれた先生、家族、支えてくれたすべての人への感謝を胸に最後の1分1秒まで戦い抜くことを誓います。」(サッカー部 古市 啓悟 部長、バレーボール部部長 野口 陽菜 部長)

土呂中生は、こういう思いをもって試合に臨みます。このスピリット【魂】を、ぜひ応援してください。お願いします。



職員シャツ 校歌を背負い愛校心を表しています

第24回体育祭を終えて

「3年生は体育祭の主役として、各クラスとも協力して取り組むことができました。しかし、本番の1週間前までは男女の協力がなく、ばらばらの状態でした。体育祭が近づくとつれて、お互いに意見を出し合い、「さらに声を出そう」や「大縄の長さを工夫しよう」などの意見をもとにクラスがまとまってきました。また、学級委員と協力もできました。」(北島 怜 体育委員長)

「体育祭を通してクラスや学年、学校全体が一つになれた実感があります。学年種目では、結果も大切ですが、それより「団結力」を得ることができました。自分たちが主役の体育祭でした。」(野口 陽菜 副委員長)

大縄跳びは土呂中学校体育祭の花形種目です。

縄の回し手は、つらいです。回すのもコツがあります。縄が地面をたたかないように「シュッ」と抜くように引いて回します。地面すれすれを通そうとすると、足を開き、低い姿勢をとらなくてはならないため、腰が痛くなります。「引っかかるなよ」って言いたくもなります。でもその気持ちを抑えて回し続けます。

跳ぶ方も思いがあります。運動が苦手な人もいます。体力がそんなにもない人もいます。疲れて休みたいと思っても自分一人だけ休むわけにはいきません。引っかかってしまい、フツと気が緩んでしまったとき、もう次の縄が回り始めている時があります。引っかかりたくないのに、引っかかっちゃいます。疲れてくると、「僕じゃない誰かが引っかかってくれないかな」と思ってしまいます。

そういう思いを乗せて、いよいよ本番です。ピストルが鳴ります。「せーの！」「いちっ」「にいっ」

たくさんの思いがあるからこそ、子どもたちは夢中になって跳ぶのです。内気な子が多い土呂中生ですが、大縄跳びのときは、跳べた喜びが爆発します。今年の大縄に乗せられた思いは来年に引き継がれていきます。